

『花伝』別紙口伝の秘伝性

——世阿弥による同書の位置付け——

重田みち

『花伝』別紙口伝に「秘スレバ花ナリ」とある。続けて「コノ花ノ口伝ニ於キテモ、タゞメヅラシキガ花ゾト皆人知ルナラバ、『サテハメヅラシキコトアルベシ』ト思イ設ケタラシ見物衆ノ前ニテハ、タトイメヅラシキコトヲスルトモ、見手ノ心ニメヅラシキ感ハアルベカラズ」とあるとおり、世阿弥は「めづらしき」を秘伝とした。観客に秘するばかりでなく、同書を「一代一人ノ相伝」と位置付け、原則的に家を継ぐに最適の一人のほかに秘したのである。もつとも、それは隠すというよりは、無器量の者には理解も活用も望めないという理由からであったかもしれない。

「めづらしき」は別紙口伝のすべての条々に説かれ、それが同書を貫くいちばんの秘事であったことは紛れもない。実際、『花伝』の初期三篇即ち年来稽古篇・物学篇・問答篇ばかりでなく「初心の人よりは猶上手」を対象とした奥義篇にも「めづらしき」ということばは用いられない。また、「心ざしの藝人」以外には相伝しないと述べた花修篇には、「よき能と申は、本説正しく、めづらしき風体にて、詰

め所ありて、かゝり幽玄ならんを、第一とすべし」「たとひ悪き能も、めづらしくし替へく色取れば、面白く見ゆべし」云々とあるが、「めづらしき」の何たるかを詳しく説いてはいない。

以前も論じたが、「めづらしき」は、後篇執筆以前の応永七年にひとまず相伝された初期三篇の末尾近くの「物数を極むる心、則花の種なるべし」の文言と密接に関連している。物数を極めることがなせ花の種なのかといえ、別紙口伝第一条に説かれるように「物数ヲ極メ尽クシタラン為手ハ、初春ノ梅ヨリ、秋ノ菊ノ花ノ咲キ果ツルマデ、一年中ノ花ノ種ヲ持チタランガゴトシ」という理由からであり「物数ヲ極メズハ、時ニヨリテ花ヲ失ウコト」があるからである。そしてそれは「見ル人ノ心ニメヅラシキガ花」だからである。つまり、初期三篇を書き終えた時に「めづらしき」が確かな概念として意識されていたかどうかはともかく、めづらしきの効用に気づいていなくては物数を極めることの重要性を説くこともできない。別紙口伝第一条に「物数」

ということばが何度も用いられることも、初期三篇の書き上がりから「めづらしき」の論までにそれほどの隔たりがないことを示している。奥義篇や花修篇の説は、この「めづらしき」と物数を極めることとの関係をふまえた論であり、したがって、そこに「めづらしき」ということばが用いられない、あるいは詳説されない理由を、両篇が別紙口伝よりも先に書かれ、その時点において「めづらしき」の概念が熟していなかったからと見るわけにはいくまい。別紙口伝にすでに書き、しかもそれを秘したからであろう。

以上述べたように「めづらしき」が別紙口伝の最大の秘事であるが、ほかにもいくつかの秘事が見受けられるように思われる。第三条の「似せぬ位」もそのうちのひとつではなからうか。同条は「物マネニ、似セヌ位アルベシ」と書き出され、「物マネヲ極メテ、ソノ物ニマコトニ成リ入りヌレバ、似セント思フ心ナシ」「モトヨリ己ガ身ガ年寄ナラバ、年寄ニ似セント思ウ心ハアルベカラズ」とあるとおり「似セヌ」即ち「マコトノ物マネ」の大切さを説いているが、これと同じ考えは花修篇第三条のテーマでもあり、「たゞ物まねにまかせて、その物になり入て、いつはりなくは、荒くも弱くもあるまじき也」と説かれる。しかしこちらでは「似せぬ」という表現はとらない。むしろ「よく似せたらんは」等「よく似す」という表現が繰り返される。それでは「よく似す」よりは「似せぬ」のほうが逆説的で、ひとひねりあるから別紙口伝のほうが後に書かれたのかといえ、そうとは言えない。花修篇には第一

条とこの第三条にその論の核となる「人体」の概念が見えている。後年の「三体」や「老体」の概念形成に結び付く注目すべき概念である由、以前筆者も論じたが、『花伝』の他篇にはほとんど用例がない。わずかに別紙口伝の右の条と第四条に見えるが、第四条の前後の説はこれも以前論じたように、「年々去来」「初心を忘るべからず」と禪を反映したらしいことばを核とすること等から、応永十五年の足利義持政権の発足後、世阿弥が当初の別紙口伝に書き足したと推測される、後年の用例である。また第三条の例は、別紙口伝の四郎への相伝本と元次への相伝本とでは表現が異なる。後に相伝された後者の系統の本には「タミソノトキノ物マネノジ、ン、タ、イ、バカリヲコソタシナムベケレ」とある文が、前者には焼損で難読であるが「たゝ、その「注……この部分焼損、

難読であるが「たゝ、その「注……この部分焼損、五字程度」えんねんの、物まね、はかりをこそ、たしなむべけれ」とあり「ただその時の風流延年の物まねばかりをこそ……」ほどの文であったと推定され、それが後に「人体」の概念を伴いつつ書き替えられたらしい。つまり、本条を書いた当初は、いまだ世阿弥の「人体」の概念が熟していなかったと解され、それが「人体」ということばを繰り返し用いる花修篇よりも後に書かれたと見るのは難しいのである。したがって、別紙口伝の「似せぬ」が花修篇に「よく似ず」と表現されているのは、「似せぬ」ということばが的確ではあるが理解しにくいものであったため、やはり最高の達人が読むべき最奥の伝書に秘する意味があったのではないかと解される。

さらに、別紙口伝第二条に「節ノ上ノ花」とされ「節ハ定マレル形木、曲ハ上手ノモノ也」と説かれる「曲」の概念が、花修篇第二条では同様の音曲技法に言及するにもかかわらず見えないのも、「曲」が別紙口伝に秘された概念であったからではなからうか。

このように見てくると、花修篇が『花伝』の第六に、別紙口伝が第七に序列されたことの意味が自ずと了解されるように思われる。この篇序は、執筆の順ではなく相伝の順を示しており、しかも相伝の段階に至り結果的に生じた序列ではなく、世阿弥の心づもりとして、花修篇を書き始めた時から、別紙口伝の草稿がすでに書かれていたにもかかわらず、花修篇を先に、別紙口伝を最後に相伝することを決めていたのではなからうか。花修篇の跋文「心ざしの藝人より外は、一見をも許すべからず」と、別紙口伝の「家ノ大事、一代一人ノ相伝ナリ。タトヘ一子タリトイフトモ、無器量ノモノニハツタフベカラズ」との差も、それを反映しているものと読みうる。別紙口伝の跋文の著述時期は詳かではないが、筆者が想定している別紙の草稿——四箇条から成り応永十年前後には書き上げられたかと推定する——にも早くこの原形が記されていたのではなからうか。

しかし、別紙口伝を最奥の秘伝とする世阿弥の位置付けは、右の跋文が書かれた時点にはそのとおりであったけれども、後に世阿弥自身それを崩してしまったものと想像される。かつての表章氏の推測のとおり、当初の世阿弥は自身の伝書をすべて『花伝』と称する

つもりであり、それは応永十年代に入ってから着想された『花習』(『花鏡』の前身)も、おそらく同様であったろう。ところが、応永二十年代に入る頃に、事情は大きく変わった。世阿弥は予想だにしない新時代の厳しさを目の当たりにし、自身の一部の説を転換せざるを得なくなり、またその状況が結果として思想の深まりと論の大展開にもつながった。その顕著な現れが『花伝』の大幅な書き替えであり、『花習』から『花鏡』への書き替えであり、『至花道』以降次々と著される伝書の存在であると考える。先述した別紙口伝第二条の「曲」の概念は、『音曲口伝』第二条や『花鏡』「音習道之事」には「節は形木、かゝりは文字移り、曲は心也」と見えているが、それもこの両書が別紙口伝を相伝し終えた人物に相伝するものであったために言及しえたのであろう。つまり、すでに別紙口伝は最奥の秘伝ではなくなっていた。後の『拾玉得花』の文言「当道も、花伝年来稽古より、物覚・問答・別紙、至花道・花鏡、如此の条々を習道して、奥蔵を極め」云々にも、『至花道』や『花鏡』が別紙口伝以上に奥深い伝書であるとの考えが示されている。このように、別紙口伝の位置付けは世阿弥自身によって、後に変えられたのである。

したがって、我々が『花鏡』や『至花道』を読む際にも、それが別紙口伝の奥に位置付けられたものであることを、念頭に置くべきであらう。

(早稲田大学演劇博物館招聘研究員)